

読売

教育ネットワーク

社会はまるごと学校——
すべての大人が先生です



(左)NIE講演会で講師を務めた関口修司さん (右)80回を迎えた土曜サロンでは、秋山純子・新NIE企画デザイナーの助言により「まわしよみ新聞」が行われた(いずれも読売新聞東京本社で/2~4面へ)

巻頭特集

日本新聞協会NIEコーディネーター 関口修司氏が熱弁

「**新聞で学校が変わる**」をテーマにNIE講演会 ^{2・3}

秋山純子・本社NIE企画デザイナーの土曜サロンスタート 4

読売日本交響楽団がASIJでコンサート 5

学校×読売新聞 光塩女子学院高等科／東京・第二亀戸小 ^{ほか} 6・7

渋谷教育学園渋谷高が慶大、東大の指導で渋谷の「街づくり」に挑戦 8

リレーエッセー 米ボストン大学「宇宙物理学を学ぶ楽しい学生生活」 9

2017.5

Vol.29

「NIEタイム」とは

- Q 「NIEタイム」って何だろう。**
A 日本新聞協会の関口修司NIEコーディネーターが、東京都北区の小学校長時代に提唱・導入した、子どもたちが新聞に親しむ活動。子どもが主体の継続的な活動で、全校児童が一斉に取り組んだ。
- Q 具体的には、どんなことを。**
A 新聞を読み、記事を選んで切り抜き、ワークシートに貼ってコメントをつけるのが基本。コメントは、記事を選んだ理由や要約、感想や意見などを記す。
- Q 小学校低学年では難しいのでは。**
A 鮮やかな色彩の写真や広告などを含め、各自が興味のある記事を探すことは可能。低学年でも十分取り組める。
- Q 新聞はどうやって準備すればいいだろう。**
A 家庭で購読している子が古新聞を持ち寄れば、クラス全員にいきわたる。新聞社のNIE担当に連絡を取り、割安な教材価格で購読する方法もある。
- Q どのように導入すればいいの。**
A 教科・領域の年間指導計画には位置づけず、朝学習などの隙間時間を活用するのがお勧め。短時間でいいので、週に1、2回程度、定期的・継続的に取り組むことが大切だ。
- Q 子どもはどのように変わるのか。**
A 初めは「難しい」「めんどうくさい」と言っていたのが、続けるうちに「楽しい」「やってよかった」と口をそろえるようになる。教師主導ではなく、子ども主導で取り組ませ、無理することなくコツコツと続けるのがポイントだ。



パネルディスカッションに臨む(左から)水木さん、関口さん。右は進行を務めた秋山純子・読売新聞NIE企画デザイナー



パネルディスカッションでの水木さん

NIE講演会「新聞で学校が変わる」

「新聞で学校が変わる」をテーマにした講演会が5月13日、読売新聞東京本社で開かれた。次期学習指導要領の総則に新聞活用学習が盛り込まれるなか、教育現場で新聞を使うノウハウを学ぼうと、小中学校の教員や大学生ら約60人が参加した。



朝学習で「NIEタイム」 地域巻き込み組織的に

前半は小学校の校長時代にNIEタイムを導入したことで知られる日本新聞協会の関口修司NIEコーディネーターが「学校を、地域を巻き込む新聞の力」NIEをやった何が悪い!と題して講演した。

関口氏は、小学校では20年度、中学校では21年度から全面実施される新しい学習指導要領について、「未知の状況に対応できる力を子どもたちにつけることが求められており、タイムリーでリアルタイムのある教材が必要だ。総則には、新聞をできる限り使うようにとの趣旨が盛り込まれている。その方向性を生かすには、NIEの日常化のための環境づくり、学校司書の活用、複数紙の読み比べが大切だ」と述べた。

また、関口氏は新学習指導要領でうたわれた主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)に関連して「NIEに合致する。学力テストでは、新聞をたくさん読む子どもほど学力が高いという分析結果が出ている。NIEに取り



せきぐちしゅうじ 日本新聞協会NIEコーディネーター。1979年、東京学芸大学卒業。東京都の公立小学校教員となり、社会科とNIEを中心に研究・実践活動を続けてきた。「NIEタイム」の活動は、区内の全公立小中学校が新聞を活用した調べ学習などに取り組む「新聞大好きプロジェクト」につながった。

「NIEタイム」で作成された実例の中から、新聞写真を題材にした小学生の作品を紹介する関口さん

パネルディスカッション

子どもの変化実感

講演会の後半は、東京都北区立滝野川小学校の水木智香子教諭も加わりパネルディスカッションが行われた。司会者は秋山純子・読売新聞NIE企画デザイナー。

—先日、滝野川小学校の「NIEタイム」を見学したが、どの学年・クラスも当たり前のように新聞に親しんでいたのが印象的だった。

水木 今年で教師になって5年目。6年生の担任を務めている。NIEタイムに取り組んで子どもたちも変わったが、私自身も大きく変わった。新聞を読み、テレビのニュースも見られるようになり、社会とつながる楽しさを感じた。

—導入するコツは。

関口 最初は新聞社が提供する記事に設問をつけたワークシートを利用して始める方法もある。子どもたちが記事を書くのは、難しいことではない。子どもたちが作成したシートにしっかりとコメントを書こうとすると教員の負担は大きくなるが、「Good」の一言でもかまわない。

—子どもたちはどんな記事を選ぶか。

水木 1面の記事に飛びつく子もいれば、一貫してスポー

ツの記事だけを選ぶ子もいる。NIEタイムを通して、子どもたちの思考が見えてくる。

—中学や高校で取り組むにはどうすればいいか。

関口 小学校と変わらない。生徒たちの主体性を生かしながら、隙間の時間を使って好きな記事を選ばせればいい。

—NIEを実践するうえで苦労したことはあるか。

水木 タイムリーな記事を見つけるのに苦戦した。一人で探すのは大変だが、他クラスの担任と一緒に新聞を毎日読み、情報を共有して記事を見つけた。仲間の存在が大きかった。

—子どもたちはどのように変わったか。

水木 15分間で新聞を選んで切り抜き、要約と感想を書く活動を初めてさせたとき、最初は時間内で終えることができた子は1人しかいなかった。しかし、1年間続けると21人が提出できるようになった。クラス全員とはいかなかったが、15分間で書ききれない力が着実に身についた。子どもたちのスクラップノートから、そうした足跡も見えてくる。

80回迎えたNIE土曜サロン

教員らが新聞活用学習（NIE = Newspaper In Education）について学びあう勉強会「読売NIE土曜サロン」が4月22日、80回目を迎えた。10年間にわたりサロンを主宰してきた鹿野川喜代美さんに代わり、4月から二代目の読売新聞NIE企画デザイナーに就任した秋山純子さんが教員や学生ら21人に、NIEの魅力を伝えた。



当日の朝刊から、紹介したい記事を発表し合う参加者たち

「EYE・愛・I新聞」

サロンは2008年にスタートし、ほぼ月1回のペースで開催。参加者が自発的に実践を持ち寄りながら、様々な視点で意見を交換し、相互に交流を図ってきた。この日は秋山NIE企画デザイナーの進行で、「まわしよみ新聞」のワークショップが行われた。3〜4人ずつのグループに

なった参加者は、手元にある新聞から紹介したい記事を見つけ、メンバーへ順番に発表。話し合いで上位3つを選び、レイアウトを考えながら台紙に貼っていった。

完成した作品は、どれも力作ぞろい。坂本龍馬の没後150年特別展の記事と、福島県三春町の滝桜の記事を組み合わせたグループは、龍馬の視線の先に闇夜に浮かぶ滝桜を配し、「見つめる先に愛がある」「美しいの」と見出しをつけた。新聞のタイトルは「EYE・愛・I新聞」。その発想の豊かさに、会場から拍手が送られた。

このほか、フィギュアスケートの浅田真央さんの引退会見を報じた各紙の朝刊から、一番気になった写真を選び、その時の浅田さんの気持ちを想像して書かせる授業案などが紹介された。

秋山NIE企画デザイナーは「新しい仲間を増やし、学校で多くの先生に取り組んでもらえるような事例をどんどん発信していきたい」と意欲満々だ。

特別支援教育について

ミニ講演 現場の悩み次々と

これに先立ち、読売新聞教



育ネットワーク事務局の保井隆之次長が、「特別支援教育のこれから〜発達障害を中心に」と題してミニ講演を行った。

発達障害は、基本的には知的発達の遅れを伴わない、主に先天的な脳の機能障害を指す。それにもかかわらず、親のしつけや育て方に原因があるという誤解があり、「学校だけでなく、祖父母や親類からも責められ、家庭で孤立してしまう父母が少なからずいる」と説明。2012年の文部科学省の調査によると、公立小中学校の通常学級には、発達障害とみられる児童生徒が6.5%いるとのデータを紹介した。

16年に障害者差別解消法が



グループごとの感性で様々な作品ができあがった

施行され、国公立学校には「合理的配慮」が義務づけられるようになった。保井次長は、発達障害の一種、アスペルガー症候群で「書字障害」もある男子受験生が、鳥取大学のAO入試でパソコン使用を認められて合格した事例を報告。音声情報での受験や代読、代筆が認められない大学入試センター試験は、「合理的配慮が十分とはいえない」と問題提起した。

参加者からは「特別支援教育が必要な生徒が3〜4人おり、複数の教員配置が必要だ」「発達障害がグレーゾーンの子がいて、まわりの子の理解が欠かせない」など、現場ならではの声が次々と上がった。

読売日本交響楽団は5月18日、インターナショナル校「アメリカンスクール・イン・ジャパン」(ASIJ、東京都調布市)で「フレンドシップ・コンサート」を行った。日本の文化・芸術とのふれあいを求めるASIJと、音楽を通じた社会・教育への貢献に取り組んでいる読売を、読売教育ネットワークが結びつける形で実現した。

2時間余にわたるコンサートは、幼稚園〜小学部低学年を対象とした1部と、小学部高学年の2部、それに中・高等部で弦楽器を選択履修している生徒たちとの合同演奏の3部構成で行われた。

OB楽団員を中心とする10人の読売アンサンブルは、モーツァルト作曲のアイネ・クライネ・ナハト・ムジークやカバレフスキーの組曲「道化師」からギャロップなど、子どもたちにもなじみのある曲を次々と演奏した。最年少で5歳の小さな聴衆たちは、入場時にはガヤガヤしていたが、演奏が始まる前にはお互いに注意し合ってピタッと口を閉じ、それでも指揮者のまねをしたり大きく身体を左右に揺らしたりと、心から演奏を楽しんでいた。

読売日本交響楽団がASIJでコンサート

アメリカンスクール・イン・ジャパン

プロと生徒 総勢45人の合同演奏も

ウェブサイトで動画をご覧ください → <http://kyoiku.yomiuri.co.jp/nwnews/contents/asij.php>



「花のワルツ」を合同演奏し終えた楽団員と中高生らは舞台上で記念撮影。すがすがしい表情が印象的だった

圧巻は、弦楽器を学ぶ35人の中高生がプロの楽団員とステージに並んだ3部。指揮者なしのぶっつけ本番。インター校らしくTシャツに短パンといったいでたちの生徒に、黒の上下で決めた楽団員が交じる奇妙な光景だった。それでも、チャイコフスキーの「花のワルツ」を音の乱れもなく見事に演奏した。

ASIJのティム・ソント副学長は「読売の皆さんは、子どもたちと意思を通わせ温かい雰囲気をつくってくれた。プロの演奏で、子どもたちはクラシック音楽を堪能したことだろう」と述べた。



▲見事な演奏を披露した読売日本交響楽団



◀小学部高学年を対象とした第2部で演奏された合唱ソングは「世界に一つだけの花」。ウエーブも起こり、舞台と観客席が一体化した

News



全国学生 参加者募集 英語プレゼンテーションコンテスト

英語で企画発表(プレゼンテーション)できる人材育成を目指す「全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」(主催・神田外語グループ、読売新聞社)の参加者を募集しています。今年は12月9日(土)に、東京都千代田区の神田外語学院およびよみうり大手町ホールで第6回大会が開かれます。対象は全国の大学、大学院、短期大学、高等専門学校、専門学校の学生です。プレゼンテーションのテーマは次の4つです。

- ラグビーW杯日本開催キャンプ地をわが町に!
- 日本語の本の英語版翻訳を売り込め!
- 地球を守れ! 環境保全の新技术を発表
- 新たなネット活用法を提案! 資源の共同利用

応募締め切りは個人の部が10月25日、グループの部が10月26日です。詳細は同コンテストのウェブサイトをご覧ください。 <http://www.kandagaigo.ac.jp/contest/>

新聞の情報の正確さについて説明する鈴木美潮専門委員



東京都杉並区の光塩女子学院高等科(荒木陽子校長)で5月10日、読売新聞教育ネットワーク事務局の鈴木美潮専門委員が「新聞から見える景色」と題して、新聞を読むコツやネットニュースの見極め方などを解説する出前授業を行った。2〜3年後に選挙権を得る1年生約130人が真剣な表情で聞き入った。

鈴木専門委員は冒頭、もしバルタン星人が地球にやってきたら、新聞のどの面にどんな記事が載ることになるかを説明。意表を突く題材で生徒たちの注意を引きつけ、新聞

が「いろいろな角度から伝える」ものであることを、分かりやすく説明した。続いて、新聞を読むコツを伝授。まずは読みたい記事を探し、その隣の記事も読むことを勧めた。「最初は分かりにくいかもしれないけれど、ずっと読み続けているうちに、『ああそういうことなんだと』、ある日突然気づく日がきます」と、継続して読むことの重要性も強調した。

ネット情報の見極め方を伝授

光塩女子学院

新聞を通して日本語を学ぶ

埼玉平成中学・高校



新聞を手に日本語のおもしろさについて語る関根健一企画委員

毛呂山町の埼玉平成中学・高校(蕪木豊校長)で4月24日、読売新聞東京本社の関根健一企画委員が中学1年から高校3年まで100人の生徒を前に、「新聞で日本語再発見」と題して出前授業を行った。

同校は全校生徒が毎年「日本語検定」を受検するなど、国語力の育成に力を入れている。関根企画委員は、校閲や新聞用語に関する仕事を務め、「なぜなに日本語」など言葉に関する著書も多い。授業ではまず、新聞でよく使われる漢字の上位5字が「日」「年」「大」「人」「国」だ

と紹介。生徒は「日」の入る熟語を書き出し、なぜ一番多いのかを考えた。当日の朝刊を手に、漢字とひらがな、カタカナの使い分けなど、解説を聞いていく。日本で一番大きな漢和辞典には5万字載っているが、新聞で使うのは3〜4000字であることや、漢字を創作する遊びから漢字の構成を考える話にはみな興味津々。「去りぬ」「戻らぬ」など文語の言い方が混ざっていることも指摘した。

業 授 前 出

読売新聞中部支社編集センター社会グループの小嶋伸幸記者が5月25日、名古屋市南区の市立桜台高校で「新聞記者の仕事」と題して1年生355人に講義した。2年生で文系か理系かを選択するにあたり、参考になる職業人の話を聞くために同校が企画した。小嶋記者は、新聞記者になったきっかけについて、「中高生のころ冷戦の崩壊などをニュースで見ている記者を目指した。いろいろな人に会え、やりがいがある」と語り、「記者の仕事は毎日勉強。大学の研究などの取材では理系の知識も必要になり、幅広い知識を持つことが重要」と強調した。

その上で生徒らに新聞活用をアピール。「新聞には毎日たくさん話題が掲載されている。新聞を読む習慣をつければ、自分の関心のある分野を見つけ、将来なりたい仕事を発見できるかもしれない」と話した。また、読売新聞は



新聞記者の仕事について話す中部支社編集センター社会グループの小嶋伸幸記者(名古屋市立桜台高校で)

小学生向けの「読売KODOMO新聞」や中高生向けの「読売中高生新聞」も発行していることを紹介した。授業を受けた生徒らは「数学などの理系科目の知識も記者に必要だと知り驚いた」「インターネットでニュースを知ることができる時代になったけれど、それで済ませず新聞を読んでみようと思った」と感想を寄せていた。

新聞で仕事発見

名古屋市立桜台高校

東京都江東区の区立第二亀戸小(安田照雄校長、児童数437人)で5月9日、読売新聞教育ネットワーク事務局の高野義雄企画委員が「新聞を気軽に読むコツ」と題して、出前授業を行った。授業を受けた5年生約60人は机の上で新聞を広げながら、熱心に新聞の役割などについて学んでいた。

授業は、5年生の教科書にある「新聞を読む」の単元を学習するのに先立って行われた。冒頭、新聞ができるまでの工程を紹介したビデオを見て、記者が取材して書いた原稿が何度もチェックを受けてから印刷されることを実感。続いて、短い記事を読んで、実際に見出しをつけてみる作業を体験した。



自分が考えた見出しをホワイトボードに書く児童たち。右端は高野義雄企画委員

記事は、多摩動物公園がコオロギに犬の芸「お手」を覚えさせることに成功したという内容で、全員で朗読してから、各自、見出し付けに取り組んだ。8人が前に出て、ホワイトボードに自分が考えた見出しを書き出し、「犬みたいなコオロギ」「コオロギ意外な芸」など、楽しい答えが並んだ。実際の見出しが、「コオロギがお手!」だったことが明かされると、児童たちから「ほんとと同じだ!」という声が上がった。

新聞の見出し付けを体験

東京・第二亀戸小

渋谷教育学園渋谷高が 慶大、東大と連携

10代の視線で「街づくりデザイン」に挑戦

魅力ある未来の渋谷を10代の視線で作ろう——。読売教育ネットワーク参加校の渋谷教育学園渋谷高校（東京・渋谷区）の生徒20人が、慶應義塾大学と東京大学の研究室のサポートを受けて「街づくりデザイン」に挑戦している。3か月以上にわたる先進的な高大連携教育プロジェクトで、生徒たちは成果を7月下旬に発表する。

「渋谷の5年後をどのようにしたいか、全員でアイデアを出し合おう」。5月10日、慶大・日吉キャンパスに渋谷高校の1、2年生13人が集まり、ワークショップを行った。指導役は同大学院システムデザイン・マネジメント研究科の神武直彦准教授と研究員ら3人。「街が持つ課題を魅力に転換するには」「その発案に独創性や実現可能性はあるか」。研究員らのアドバイスに触発された生徒たちは、付箋紙に次々とアイデアを書き込み、チームごとに配られた大きな紙をみるみる埋めていった。

一方、東大空間情報科学センターの柴崎亮介教授の下でも、別の2つの生徒チームがアイデアを練っている。「外国人に渋谷の街を快適に楽しんでもらいたい」



東大空間情報科学センターで研究テーマを絞り込む渋谷高校の生徒たち（4月13日、東大で）

「大震災発生時に役立つ情報を提供したい」。こんなテーマを掲げて4月に2回のワークショップを行った。指導する大平 亘^{わたる} 特任研究員が

「みなさんのアイデアに辛口の評価をしますが、めげずに反論してください」とはっぱをかけると、発奮した生徒たちは「街中でアンケート調査をする必要がある」「外国人になりきって疑似体験してみよう」とテーマの実現に夢中になっていた。

慶大、東大など5大学は主に宇宙分野に関わる人材の国際育成プログラム「G-SPACE」で連携しており、その一環として4月に今回のプロジェクトは始まった。大学の研究者らが大学院レベルの研究方法を高校生に教えることで、双方の学びを深めることを目指している。5チームに分かれた生徒たちは放課後や週末を利用して、教授や研究員とミーティングを重ねている。



慶大大学院の研究員（右）からアドバイスを受けながら、アイデアを書いた付箋紙を整理していく渋谷高校の生徒たち。アイデアの量に研究員が驚くシーンも（5月10日、慶大・日吉キャンパスで）

News

参加者募集

文学と教育を考えるセミナー

日本近代文学館（東京・駒場）は7月1日、教員を対象としたセミナーを開催します。今回のセミナーは、貴重な資料の宝庫であるバックヤードのツアー、企画展「教科書のなかの文学／教室のそとの文学——芥川龍之介『羅生門』とその時代」の観覧に加えて、第一線の研究者によるレクチャーという豪華な内容です。講師をまじえての意見交換会もあります。読売新聞社が後援する「夏の文学教室」へとつながる新たな教育事業です。

「教室」と「文学」をつなぐ

——日本近代文学館を橋渡しとして

- 日時 7月1日（土）14:00～16:10
- 会場 日本近代文学館（東京・駒場）
- 定員 60人（バックヤードツアーは先着30人）
- 参加費 1000円（資料代、観覧料などを含む／当日支払い）
- 講師 安藤宏
（東京大学教授・筑摩書房教科書編集委員）
中島国彦
（早稲田大学名誉教授・明治書院教科書編集委員）
- 申込み ①名前（フリガナ）②所属（学校名）
③電話番号 ④FAX番号 ⑤メールアドレス
（④・⑤はいずれか）を記入の上、
FAX:03-3468-4185 または
メール:kyoshitsu@bungakukan.or.jp へ。
- 問合せ 日本近代文学館 担当:吉原
受付 9:30～17:30（日月休館）

海外で学ぶ・リレーエッセー 29

米ボストン大学

「宇宙物理学を学ぶ楽しい学生生活」

明星高校(大阪府)卒、ボストン大学2年(執筆時)

山本将也 さん



大阪府にある母校からアメリカの大学に留学したのは私が初めてで、そのことを正直誇りに思っている。日本を離れてみようと、ある意味、直感的に決めたが、今なら決断の理由を説明できる。人生に刺激がほしい。いつも同じことをするのはつまらない。これが日本を離れアメリカの大学に留学したいちばんの動機だ。

暗闇の宇宙を数式で表せることに魅せられて、大学では宇宙物理学を学ぼうと決めた。ボストン大学(BU)は第一志望ではなかったが、天文学部も物理学部も、偉大な研究者や教授陣を擁している。それを理由に、ボストン市の中心部にあるこの大学に学びの場を定めた。日本ではないこの場所の方が、自身自身について考える機会に恵まれていると思っている。

BUでの1年目を終え、2年目になる今、自分が本当に好きなことが理解できた。それは、

ボストン大学

1839年創立の米私立大学。学生数は世界130か国からの留学生を含め、学部、大学院を合わせて3万3千人以上。教職員数は1万人近くに及ぶ。



米公民権運動指導者でボストン大出身のマーティン・ルーサー・キング師の記念看板の横に立つ山本さん本人提供



難問に立ち向かい、それを解決する——ということだ。天文学、物理学の教授から、興味深くも難しい問題が毎週出され、どうやって解いたらいいかわからないこともしばしば

だ。それでも何か描いてみようとしたら、公式を書き出したりする。すると不明瞭だったものの霧が晴れ、問題を解ければ、「ユリーカ(やったぞ)——」だ。そうやって1枚の紙に書き付け

り、自分自身でいることなのだ。重要なことは、他人の立場を気にせず、自分の思考様式に留ま

う。(会報編集部抄訳「The Japan News」2016年11月6日)

たものが、学びの中で至福をもたらしてくれる。とくに物理学からは、人生にとって重要な教訓が得られる。その一つが相対性理論から得た教訓だ。あらゆるものが相対主義的であり、人はどちらが真実か、誰が真実か、何が真実かわからない。自分はよく他人の立場から自分を見る傾向があるが、それが間違っていることがよくあることに気が付いた。

自分は学問の世界での問題解決に価値を置いているのか、一般社会の中で問題解決に価値を置いているのかわからないし、このまま大学院に進学するか、就職するかも決めていない。いずれにせよ多くの難問にぶつかることになるだろう。しかし、両親や私を支えてくれる人々に感謝しつつ、学部学生として残る3年間、アメリカでよく遊び、よく学ぶことは間違いないだろう。

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェロシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェロシップの詳細はウェブサイト(<http://ryu-fellow.org>)へ。

英語の原文は <http://the-japan-news.com/news/article/0003275804> でお読みいただけます。